



令和7年10月31日

教育厚生委員会行政視察報告書

伊豆市議会 教育厚生委員会

青木 靖

1. 日 程 令和7年10月23日～10月24日
2. 視察先 ①愛知県愛知郡東郷町 障がい者就労支援B型ジビエレストラン「ZQI」
②愛知県豊橋市 豊橋市立八町小学校 英語に浸る「イマージョン教育」
③静岡県牧之原市 民間施設にテナント入居の「図書交流館いこっと」

3. 視察報告

①障がい者就労支援B型 ジビエレストランZQI (ゾイ)

社会福祉法人 tomoni plus が運営。理事長の濱野剣氏より説明を受けた。

同社会福祉法人は、高齢者介護サービス事業2事業、障がい者支援施設14施設（ショートステイ・放課後等デイサービス・児童発達支援専門校・就労移行支援自立訓練事業所・生活介護事業所・就労継続支援A型・同B型・共同生活援助グループホーム）、訪問介護サービス、自立支援サポート、教育部門2事業、CSR事業を行っている。

同レストランでは、一般的な障がい者就労継続支援作業所と比べて高い賃金を支払っていることが大きな特徴。その仕組みは、障がい者本人の望みを聞いて、2ヵ月ほどかけて本人の適性をみて、向いている作業所で働いてもらうこと。

レストランで食に関わりたいと思う障がい者がここで働いている。従来は働きたいと思っても、障がい者がレストランで働くことは難しかった。ここでは、障がい者が「一人工」として働いている。賃金が高い一方、サボる人は辞めてもらう、という。

障がい者に居場所を提供することを目的としないで、売り上げを上げることを目的にしている。ゆえに、工賃の安い箱折り等の作業は行わない。しかし、レストランとしては、障がい者がいるから、比較的安い価格設定でコース料理が提供できている、とのこと。店舗は高級感があり、ホームページの情報発信の仕方も訴求力が高い。福祉関連事業を感じさせない。

多くの事業を展開して、多様な障がい者の能力に合った仕事で働いてもらえる環境を

作っている点が、特徴的。福祉の制度に精通している人、時代のニーズに答えるサービスの事業展開が出来る人、マーケティングや事業経営のノウハウがある人、などが集まって、福祉の新しいあり方を示している。

②英語で授業を行う「イマージョン教育」豊橋市立八町小学校

豊橋市は、2005年から英語教育推進特区、2007年から小学校3.4年生で英会話授業を先行導入、2017年「英語で学ぶ」モデル事業を八町小学校で行った。2020年度から6年生でイマージョン教育コースをスタートした。

実は、八町小学校も児童数の減少傾向が続いたことから、新たな取り組みにチャレンジした、という側面があったようだ。

国語と道徳以外は基本は英語で授業を行うが、あくまでも、学習指導要領に基づいた教育課程であるため、学習内容は通常のクラスと変わらない。

イマージョンとは、浸るということ。英語に浸ることで、リスニング能力が飛躍的に伸びる、とのこと。又、他の教科についての学力が下がることは無いとの結果が得られている。

英語で授業を行うにあたり、ネイティブのNETと英語免許・小学校免許を持つ日本人教員の二人の担任が協力しながら準備を行う。教員の負担は、通常より増える。

授業の様子を観たが、生徒たちは、日本語混じりではあるが英語中心に話し、理科や算数の授業を受けていた。教科の内容と英語での表現の両方を同時にこなしている様子から、論定的思考能力も強くなるのではないかと感じた。グローバル言語である英語を身に着けることは、これからの時代を生きる日本人にとっては非常に大きな優位性を持つことになることは間違いなく、是非とも当市でも導入したいのはやまやまである。

実施から5年目であるが、課題は教員の継続的な確保ではないか、と感じた。

中学校の英語の免許と小学校の教員免許の両方を持っている教師の中で、授業の準備に通常以上の時間を必要とし、外国人教師とのコミュニケーションも必要になるし、生徒も通常クラスより外国籍や帰国子女も多いなどの負担を考慮しても、イマージョン教育に関わりたいと考える教師が何人いるかが問題になるのではないか。課題を克服する方策を考えて、この取り組みが広がると、今とは違う日本の将来が見える気がします。

③新たな図書館のあり方 図書交流館「いこっと」 牧之原市の取り組み

牧之原市の旧相良町にある「交流・学びの拠点 図書交流館いこっと」は、同所にあったホームセンター（ジャンボエンチャー）が撤退し、空き店舗となった建屋を利用し、公民連携で運営されていることが特徴である。

同地域では、旧町時代に大きな図書館は無く、住民は近隣の吉田町や菊川町の図書館を利用していた、とのこと。同施設は、半分が公の図書館で半分が民間のカフェやボウリングなどが出来る複合施設になっている。元々はホームセンターであったため、広々とした空間があり、それを壁で仕切ることなく、開放的なつくりになっている。

オープン以来、来館者は目標を上回り、以前とは逆に、近隣の市町からも人が訪れている、とのこと。学生から乳幼児の子供連れ親子や高齢者まで、幅広い年齢層の方々にとっての「ちょうどいい居場所」になっているようだ。

敷地は、隣接するスーパーマーケットと同じオーナーとのことで、家賃は60万円。最寄り駅はないが、幹線道路から近く、駐車場もあり、適度に人が集まるのに適している位置に立地しているともいえる。なかなかこういった「ちょうどいい」物件は出ないとは思いますが、ホームセンターが撤退した建物の使い方としては、成功例だと思う。行政としては、補助金を上手く利用して、利用度の高い良い施設を作ったと感じた。

以上